琉球大学学術リポジトリ

応募作文

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学アジア太平洋島嶼研究センター 公開日: 2012-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/22947

３．応募作文

私の島の自然と文化

沖縄県立八重山高等学校
２年　平地　渚

私は沖縄県の石垣島に住んでいます。石垣島はサンゴ礁に囲まれた、海が美しく自然が豊かな島です。貴重な生き物も多く生息し、海ガメも産卵にやってきます。沖縄ブームということもありたくさんの観光者も訪れるようになっていますが、最近、この先祖から受け継がれてきた石垣島の自然と文化のバランスが崩れようとしています。そのため小・中学校や高等学校、地域では様々な取り組みが行われ、自然と文化を保護していこうという動きがより高まっています。

私の出身の小学校では６年生になると学習発表会で、地域に伝わる、男子は獅子舞・棒術、女子はバスヌトゥリ節を踊ります。これは八重山の文化を継承していこうということで、約30年間継続されています。男女ともに地域の方々に総合学習の時間や放課後に指導していただいています。また、クラブ活動でも三味線クラブ・舞踊クラブがあり、こちらも地域の方々に指導していただいています。

石垣には高校はたった３校しかありませんが、それぞれ郷土芸能部があり、八重山の踊りや唄を学んでいます。私が通っている八重山高校の郷土芸能部はハーリーや地域の祭りへ参加したり、老人ホームや福祉センターで公演したりしています。また、石垣市民会館で「郷土芸能の夕べ」という八重山高校だけの発表会も行っていて、地域の人々に自分たちの文化の素晴らしさを伝えています。放課後、学校付近には練習の声や唄、三味線や笛の音が響き渡っています。

地域の行事には石垣島祭りや豊年祭、産業祭り、石垣島マラソン大会などがあり、石垣島祭りは郷土意識の高揚と、市民の連帯を深めることが目的とされています。これは２日間行われ、２日目には市民大パレードがあります。市役所通りをエイサーや旗頭、婦人会による郷土の踊りや小中学生のマーチング演奏などが行われます。このマーチング演奏も安里ユンタなど八重山の唄を現代風に明るくし、聞く人を楽しませてくれます。

豊年祭は今年取れた収穫物への感謝と、これから先１年の豊作祈願の意味がこめられており、１日だけ行われる地域と２日間行われる地域に分かれます。また、公民館や御嶽で行われたり、神々に扮して家々を回ったりなど各地で様々です。しかし、現代では農業従事者が減少する傾向にあるため、継承者不足が問題になっています。

産業祭りは地域の特色ある商品やサービス等を展示・販売し、生産者の意欲の高揚と八重山の魅力を島内外にアピールし、八重山地域の産業の振興を図ることが目的とされています。昭

和53年から約30回にのぼり行われてきた産業祭りは、石垣市だけでなく竹富町・与那国町をはじめとする多くの地域・企業から支援されています。しかし、ここ数年平均すると 40～50店舗と年々参加店舗が少なくなり、マンネリ化していることが問題となっています。

石垣島マラソン大会は国内外からたくさんの人が参加する大きな大会です。中・高校生が部活動単位で参加したり、障がいのある人も市民の協力で力走し、両足義足ランナーとして有名な島袋勉さんも参加し完走するという感動のある大会でもあります。多くの人がボランティアとして参加し、道沿いではマーチング演奏の応援や地域の人々の応援でにぎわっています。

近年、沖縄ブームということで石垣島にもたくさんの観光者が訪れるようになっています。澄みきった空、コバルトブルーの海、自然豊かな町並み、夏川りみさんやBEGINさんなどのスターも生まれ、さらに人気は高まっています。石垣の産業は観光業で成り立っているといってもいいほどその割合は大きいものです。観光者を見ない日はないほどです。

石垣島の人気が上昇するのに伴い問題も発生しています。例えば、市の新空港やホテルの建設も予定されています。現在の空港では滑走路の距離が他の空港と比べて短く、オーバーランという滑走路を越えてしまう事故が起こったり重量制限が課されたりします。新空港が建設されると、今より大型のジェット機が運行可能となり燃料を宮古島などでの給油や乗り継ぐ必要もなくなりますし、農産物や水産物を東京などの大消費地まで直接輸送できコストの削減や日数の短縮にも繋がります。その結果、農業・漁業・観光業の発展にも繋がるでしょう。観光の発展から、若者の働く場所も増加し、人口の流出も防げます。事故もなくなるでしょう。しかし、建設予定地付近の住民からの不満や環境面での問題も出ています。建設予定地付近には、絶滅を危ぶまれているセマルハコガメやコウモリ、市鳥であるカンムリワシ、ヤシガニやオカヤドカリなど様々な貴重な生き物への影響が考えられます。また赤土流出問題もあります。赤土は亜熱帯地帯特有の土で、海に流出すると珊瑚の生態に悪影響を与え、死滅にまで至ってしまいます。この影響が心配されている白保の海は、美しいサンゴ礁が広がり、島の誇りになっていて、多くの観光者がこれを目的に訪れるほどです。また、空港が完成すると付近にはホテルやコンビニエンスストア・レストラン、お土産店などいろいろな建物が建つでしょう。タクシーやバスなどで交通量が増え、排気ガスも増加します。便利になるだけが発展するということとは限りません。人間の都合のよいことだけをみて物事を進めてしまうと石垣島は、世界はどんどん汚れていってしまいます。困るのは今生きている私たちだけではありません。これから生まれてくる私たちの子供たち、未来の子供たちにも大きな影響が及びます。

これまで受け継がれてきた、未来へと受け継いでいくべき素晴らしい地元の自然と文化を守るために一体私たちには何ができるでしょうか。私たちはこれまでこの豊かな自然と文化を売り物にし、たくさんの観光者を魅了させ、経済を豊かにしてきました。しかし、今はその自然と文化を守るときだと私は思います。

地域復興の取り組みとして、豊年祭では、現代風に華やかにしていた電飾を昔のスタイルの松明に戻したりする地域や、着物を着けて参加する人も増えるなど、地元の地域性を活かし、独自の文化を守ろうとする動きが見られます。文化財として祭りの記録を行う研究者も増え、全国的に知られるようになっています。私も小学生のときに豊年祭に向けて地域の方々から太鼓やその掛け声を習いました。このように小・中学生の参加も増えています。

産業祭りでは、今年新たな試みとして「高校生市場」が開かれます。そこでは、地元の野菜

を使ったジュースの販売や、八重山青年会議所が銀行の役割となって高校生に出資し事業計画書を作成させたり、終わった後は事業報告書と収支決算書を出してもらったりと、企業家精神の育成が行われ、地元石垣の大人自身が地元の若者を育てようと活動しています。この「高校生市場」で産業祭りがより身近なものになり、同じ高校生が頑張っていることに影響され、これまで以上に高校生や若者の参加が見込まれ、さらなる産業の発展が期待されています。

新空港建設による環境面への取り組みは、赤土流出防止対策として、土壌を選ばずに根を大きく張る月桃を植えたり、建設現場で使われているステラーシートを張り土砂を防いでいます。また、コウモリには人工洞が新たな住処として作られ、海を守るために白保ではサンゴ礁保護研究センターも開設されました。

最近では、八重山の素晴らしい星空を守っていこうという自然保護への観点から「南の島の星まつり」が新しく開かれたりと、地域の人が自然を守ろうと動いています。

この平和な石垣島でも時代の流れと共に様々な問題が出てきています。今、私たちに求められていることは、自分たちの自然と文化の重要性を理解し、自分たちの力でそれを守り、次の世代のためにより崇高なものへと発展させていくことだと思います。また、自分たちの地域だけでなく世界へ目を向け、国際感覚を養いながら、自分たちの文化を世界へ発信できるよう、しっかりと私の島の自然と文化についてこれまで以上に深く学んでいきたいと思います。

島の自然と文化について

鹿児島県立大島高校　3年6組
茂　野　武　史

私は奄美大島という小さな島に住んでいます。そこは豊かな自然に囲まれています。中でも海が美しく、私はよく釣りやダイビングをします。釣りではイラブチやコーグルを釣ったり、ダイビングでは様々な種類のサンゴや熱帯魚を見たりすることができ、直接自分の肌で奄美の海の豊かさを実感することができます。

その美しく豊かな海のおかげで、奄美の観光業と漁業は発展しています。観光業ではたとえばシーカヤックマラソンという競技が行われますが、この大会に参加するために全国各地、時にはアメリカなどの外国からも選手が訪れて、毎年300人くらいの人が参加しています。また美しい海を海中から鑑賞できるように、グラスボートがあります。漁業ではカツオの一本釣りが盛んです。この漁法は大きな船に5~10人が乗り込み、カツオの群れに向かってエサとなるキビナゴを投げ込みます。キビナゴは食べられないように船に隠れようとします。そこに疑似餌とよばれる返しハリのなく赤い羽根のついているハリを、リールの無い竿に付けて海に沈めます。するとカツオが疑似餌をエサと勘違いして釣れるという漁法です。返しハリがついていないのは、ハリ外しが素早くできるからです。もし返しがあってハリを外すのに時間がかかってしまうと、せっかく船の周囲に集まっているカツオに逃げられるからです。返しがないとハリがしっかりと刺さっていないので、すぐに外せます。またリールがないのは、カツオは持久力があり、もし糸を持って行かれると釣り上げるまでに時間がかかってしまうからです。そこでかかった瞬間に思いっきり竿を挙げて釣り上げます。

しかし、最近サンゴの白化現象や漁獲量の減少に奄美大島は悩まされています。これらの原因は主に2つあると私は考えます。1つ目は埋め立て工事による開発の影響です。埋め立てをすることで魚、特に稚魚が生息する干潟や波打ち際の環境が変化し、防波堤のような四角い海岸線になってしまいます。これでは持続的な資源の利用ができません。また街中から海に流出する汚染物質も問題です。奄美の小さな集落では下水道が整備されておらず、台所や洗濯機の排水が直接川に注ぎ込んで海へと流れ込みます。人数の少なかった間は海の分解により影響が小さかったと思いますが、埋め立てや宅地開発などにより人が多く集まってくると海の分解できる限度を越えてしまいます。また分解されにくい有毒物質は藻類や魚の体内に蓄積して、魚自体が死んでしまうことも考えられます。海に流れ込んだビニールなどは、魚やウミガメが食べても分解できず、多くの命を奪っています。2つ目は、森林伐採による自然環境の破壊です。森林が破壊されることで光合成の働きを行う植物が減り、二酸化炭素が増加して地球温暖化につながります。その結果海水温が上昇し、サンゴの白化現象につながったと聞いたことがあります。また奄美大島は春から秋にかけて台風の被害により土砂崩れが生じます。その土砂崩れを最小限に抑えるのは森林です。なぜなら森林は強い根を張ることで表土の流出を防ぐことができるからです。森林は緑のダムともよばれています。しかし木材資源やチップにするために一斉に斜面を伐採してしまうと、雨によって表土が流出してしまう、いわゆる赤土の問題が生

じます。海に土砂が流出してサンゴに覆い被さると、サンゴは共生している褐虫藻が死んだり、あるいはサンゴから逃げてしまいます。今まで褐虫藻から栄養分をもらっていたサンゴは、自分で栄養分を取らなければいけません。しかしただでさえ南の海は栄養塩類が少ないので、自分自身で生きていくための栄養をとることができずに死んでいく、それが白化現象の原因だと聞きました。

私はこのようなサンゴの白化減少、漁獲量の減少は奄美の経済の危機だと思います。なぜなら奄美の経済は主に美しい海を利用した観光や漁業から成り立っていると考えていますし、資源や立地環境で不利な奄美が今後も生活を継続するためには、海からの恵み無しでは成り立たないと思うからです。奄美大島では現在土木工事や大型店舗の進出など、経済発展が著しいと言われています。テレビの中で見ていた便利な社会、たとえばコンビニエンスストアやファミリーレストランなどもできました。しかしこれらが奄美大島を支えていく柱となるのか、と考えるとそうは思えません。島に住み、島の暮らしを今後も続けていくためには、海からの恵みが必要です。もし漁業や観光資源が無くなってしまえば、せっかく便利になって住みやすくなった奄美大島で生活する糧を失い、職を求めて大都市へと出て行かねばならなくなります。実際にいま私の実家のある古仁屋や、祖母の住む加計呂麻島では若い人たちがどんどんと地域を去り、過疎化が進んでいます。祖母の集落で行われている「カツオ祭り」とよばれるお祭りも、参加する子供が減って寂しいと言います。そうなるとますます経済活動は低下し、奄美全体の活性は失われると思うのです。

私はこの奄美大島が大好きです。父は瀬戸内町で数人の仲間と養殖業を行っています。大きな養殖が記者は、奄美大島で育てた魚を鹿児島や関西地域に出荷するそうです。しかし、私の父は地元奄美で出荷するといい、名瀬市などに卸しています。なにも慈善事業ではなく、輸送費などを考えると価格が上昇してしまい、安い値段で地元に出荷するのと大都市に出荷することとの収益の差はあまり無いそうです。そんな奄美大島の生活を守るためにも、私は次のような手だてが必要だと考えています。

１つ目は奄美の海を守るために、奄美の山を守ることです。森林伐採を行うことで土砂の流入や陸上からの栄養塩類の流入などが乱れてきます。豊かな海からの恵みを受け取るためにも、陸上の開発をよく考えなければなりません。もちろん全ての開発が不要だとは言いません。私の家がある瀬戸内町と高校のある名瀬市は、今でこそ１時間もあれば行くことができます。大きなトンネルが何本もでき、以前２時間以上かかっていた道のりがだいぶ楽になりました。それ自体には感謝しています。ただし、ある程度利便性が得られたら、我慢することも必要だと思います。山を切り崩して得られた利便性は、大きく考えればその恩恵を受けるべき住民の首を絞めてしまうことになります。２つ目は埋め立てなどを減らすことです。宅地や大型店舗を呼び込むための土地を海岸線を犠牲にして造っても、そこで生活したり買い物したりするためには海の恵みが必要なのです。今の奄美大島は最低限の便利さを手に入れました。これからは我慢することも必要なのではないかと考えます。

奄美はこの豊かな自然を世界遺産登録させようと動いていると、パンフレットで知りました。このような自然環境を前面に押し出した観光業や漁業、農業こそが、これからの奄美大島で我々が生活するのに必要だと思います。

奄美の文化と自然　～受け継がれてきたもの～

鹿児島県立大島高校３年　　泉　萌

＜はじめに＞

奄美の人々は自分たちの住んでいる空間を「シマ」という言葉で表現します。だからそれは時には「奄美」を指す言葉であったり、「集落」を指す言葉であったりします。もちろん本来の「島」のこともさします。だから、奄美の人が「シマ」といった場合どの意味で使っているかはその時の状況で判断しなければなりません。

私はシマ（奄美）の暮らしがとても大好きです。青い海、空、多くの固有種を含む貴重な動植物を育む広葉樹林の山、澄んだ空気、満点の星空、そしてきれいな渓流。シマ（奄美）の自然はどれをとっても最高です。

でも、私がシマ（奄美）の暮らしが大好きな理由にはもうひとつ別のわけがあります。

それは、都会と違いまだ、身近に自然があり、自然と共存していると実感できる暮らしがあるからです。でも近年その様子が少し良くない方向に変ってきているように感じられ心配です。

そこで、我が家のいくつかの行事を通してシマ（奄美）の文化と自然について考えてみたいと思います。

＜受け継がれてきたもの＞

私の家では年中行事をとても大事にしています。

お年寄りのいない家庭としては最近ではめずらしいのではないかと思っています。それは父も母も奄美の文化が大好きで、シマ（奄美）の行事をとても大切に考えており、自分たちの幼かった頃に体験したことを私たち子どもにも体験させたいと考えているからです。

まず、正月です。

前日までの正月準備のことから話すと、大掃除は勿論ですが、鏡餅などのお供えや正月料理の準備があります。鏡餅にはウラジロとユズリハ、それとダイダイを飾ります。門松は我が家では残念ながら飾っていませんが、大和風の門松と違って竹、松、ユズリハ、を浜から取ってきた珊瑚の砂を持った上に立てます。ところによっては椎の木も立てます。埋め立てが進み、浜が遠くなってしまった名瀬の町ではあまり見かけなくなってきました。最近は造園業者が大和風の門松を官公庁やホテルなどにたてているのが増えてきたように思われます。それを見ると何か寂しいものを感じます。もっとシマらしさを大事にして欲しいと思います。

でも、海辺の近くのシマでは昔ながらの門松を見る事もできるし、白砂や珊瑚のジャリで玄関や庭を敷き詰めたすがすがしい様子をみることができます。もちろん、お墓にもきれいに敷き詰められています。シマではお正月のまえに家だけではなくお墓も同じように掃除をし、ご先祖様もいっしょにすがすがしい気分で新しい年を迎えるのです。

料理はなんと言っても「ウワンフネ」、骨のついた豚肉とツバシャヤセ（つわぶき）、の煮物を食べるのが年越しの慣わしです（写真１）。笠利の方ではツバシャのかわりにアザミを食べるそうです。スーパーでも売っているというので、この慣わしが大事に受け継がれている事がわかります。昔は正月前に豚を殺し、塩漬けにして保存し一年間大事に使ったそうです。今は肉屋さんから買ってくるのですが、肉屋さんの店先が賑わうのも年の瀬の風物詩の一つです。

元旦の朝は三献をします。塩、昆布、スルメを各人少しずつ取り、お神酒（シマの地酒黒糖焼酎です、もちろん未成年者は形だけですが。）も取ります。次に赤碗、刺身、黒碗の順に料理を食べます（写真２）。昔はこの赤碗、刺身、黒碗のそれぞれの前にお神酒をいただいたそうで、三献の名前もそこに由来しているようです。瀬戸内町の方では「シンカン」という吸物を食べるようです。「シンカン」の器は少し変わっていて、器の蓋が吸い物椀と違って外にかぶるようになっていて、ちょうど茶碗蒸の器を大きくしたもののようです。瀬戸内町出身の知り合いのおじさんは「シンカン」を食べないと正月気分がでないと言っていました。残念ながら私はまだ食べたことがないので一度は食べてみたいと思っています。きっと、昔のシマの正月を感じることが出来る味なんだろうと思います。この「シンカン」の器も名瀬あたりでは手に入らなくて古仁屋の街に行かないと売っていないと言うことでした。

１月７日の日には「ナンカンジョセ」を食べます。大和で言う「七草粥」のことです。七種類の野菜を入れたものです。入れる野菜の種類は大和とは少し違うようです。七歳になった子どもが七件の家を回って「ナンカンジョセ」をもらっている姿を見かけることが出来ます。「ナンカンジョセ」は家々で少しずつ違うのでおもしろいです。私も晴れ着を着せてもらい親戚の家を回った思い出があります。集めた「ナンカンジョセ」はいっしょにして家族みんなで食べます。

小正月の日は「なりむち」を飾ります。五穀豊穣、家内安全、商売繁盛を祈願してブブ木（りゅうきゅうえのき）の枝に色とりどりのモチをつけて飾ります。私たち姉妹も幼い頃からモチの配色にいろいろと趣向をこらしたものです。出来上がった「ナリムチ」は先祖棚や床の間、玄関そしてお墓にも飾ります。近年ブブ木が減ってしまい問題になっています。ブブ木は蝶の食草なのでこのままでは蝶の減少、絶滅につながるのではと心配する声も聞かれます。伝統行事とのかねあいで難しい問題です。私の家では一度使ったものをとっておいて、2.3 年は使うようにしています。

旧暦の三月三日は「セック」と言い、大潮になるので、家族で潮干狩りに出かけたりします。この日に海に行かないと、カラスになってしまうという言い伝えがあります。一昔前までは、名瀬の商店街や役所までも午後はお休みになったほどです。私も小さい頃から学校が休みの時は毎年、家族と一緒に潮干狩りに行っています。

＜失われつつあるもの＞

昔、シマの人々は、「ユリムン」（漂着物）に神が宿ると信じていました。黒潮に乗っていろんな物がシマへ漂着したのでしょう。でも、今は海へ行くとペットボトルや空き瓶などのたくさんのゴミが打ち上げられています。それらのゴミはほとんど外国産の物です。そして、減ってきていた廃油ボール（コールタル）がまた増えてきています。私はそれらを見てとても悲しく思います。昔とはずいぶん変わってきてしまっています。わたしたちはこれから、ユリムンには神が宿っていると思えるような美しい海を取り戻さなくてはなりません。それからもう一つ、考えなければならない問題があります。それは、海産資源の乱獲問題です。そうなってしまった理由の一つに、海辺まで道路が通ったことがあります。便利になったおかげで多くの人がおしかけ、必要以上に獲物を搾取してしまったことがあげられると思います。昔のひとは、「これは神様の分、これはクワァ・マガ（子孫）の分」と残し、全部は取らなかったと聞きました。

その他に上げられる海辺の問題として、防波堤や船だまりの建設のための砂浜の減少があります。そのせいで、海辺での夕涼みなどの文化が失われつつあります。

旧暦の七月七日は七夕です（写真3）。この日のために私の家では二、三日前から母が子どもの頃にしていたように家族総出でサンバラという竹を編んで作った大きなザルいっぱいに七夕飾りを作ります。そして、当日の朝、朝露を取ってきて、その水を使って墨をすり、短冊に願い事を書きます。七夕には、七夕飾りを目印に御先祖様の霊が降りてくるという言い伝えがあります。満天の星空を仰ぎながら、先祖との繋がりを感じるとても気持ちのいい行事です。この七夕をしないと、お盆に御先祖様を迎えることができません。

＜われわれに託されたこと＞

旧暦の八月十三、十四、十五がお盆です。お盆の間は御先祖様が家に帰ってきているので、三度の食事をお供えします。御先祖様のお箸には、「ショウロウ箸」を使います。私は、「ショウロウ箸」を採りに林道へ父と出かけたことがあります。そのとき山で、移入種である「シロノセンダングサ」や「セイタカアワダチソウ」がたくさん生えていました。

これも、自然破壊の表れだと感じました。生態系の基礎である植物群に異変が起こると、他の生物にも影響があるのではないかと心配です。また近年、移入種動物による生態系の破壊も大きな問題になっています。

旧暦八月、最初の丙の日がアラセツと言います。この日の早朝、龍郷町の秋名集落で「ショチョガマ」が行われています。私も何度か家族と見学に行ったことがあります。朝日が昇ると同時に「稲魂」を招く行事を見ていると、昔の人が自然と共に生きていたということを感じ、感動しました。

同じ日の夕方、同じ秋名集落の海辺では、「平瀬マンカイ」が行われます（写真4）。海のかなたの豊穣の国「ネリヤ」から、「稲魂」を招きよせる神事です。両方の行事とも国の重要無形文化財で、研究者や報道関係者などの多くの見学者が訪れにぎわいます。しかし、昔の面影が損なわれているようで、残念な気もします。

「平瀬マンカイ」が多勢の見学者でにぎわっている同じ時、入り江を挟んだ対岸でおばあちゃん二人だけのもう一つの平瀬マンカイが行われています。ある年、母の知り合いの人に教えてもらっていたので、その東（アガレ）集落の祭りを見学に行きました。珊瑚の石に赤飯をはさんで海辺の岩にお供えし（写真5）、神に手を合わせ祈るだけの静かなお祭りです。稲作をしている家の人だけがやるもので、「自分たちも今年は人手を頼んで米を作ったけど来年はできるのかねー」と寂しそうに笑って話すおばあちゃんの姿に本当の祭りの姿を感じ感動しました。

おばあちゃん達の姿に感動を覚えたのは、自然と共生したシマの暮らし、その中から生まれてくる文化に少しでも触れる事ができた時のなんとも言いようのない心地よさを感じたからだと思います。稲作が衰退した現在、祭りの形は残せても心を残していくのは無理な事かも知れません。でも、形だけでもなんとか後世の人に伝えていきたいと思います。

＜おわりに＞

シマの暮らし、文化は自然とともに生きづいているのです。自然が変容すれば、暮らし、文化も変わります。暮らし、文化が変われば自然もかわります。どのようにすれば自然と共生できるのか考えていかなければいけないと思います。そのための方法の一つは、私たち若者が「シマ」をもっと知る事だと思います。近年、奄美を世界遺産に登録しようという声があります。

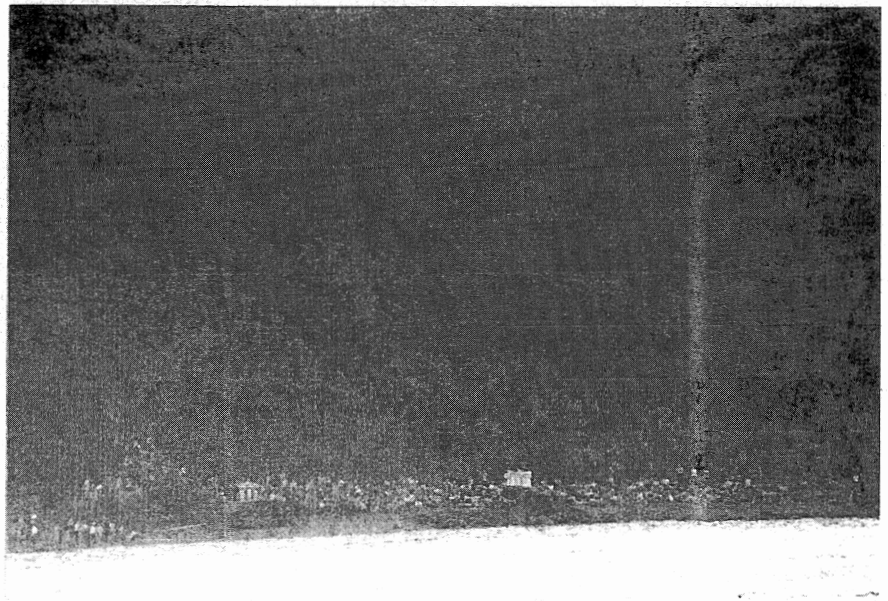
そのためにも自分たちの足元をもっとよく知る事、そして、自然と共生した暮らしができるようにすることが「素晴らしい島だね」と世界中の人に認めてもらえることだと思います。そして、なにより「シマは最高」と自分自身もずっと思えるような奄美にしたいです。

(写真1) ウワンフネ

(写真2) 三献

(写真3) ショケョガマ

(写真4) 平瀬マンカイ (東から見た)



(写真5) 東(ヅガレ)の平瀬マンカイ

『私の島の自然と文化』

活水女子大学
伊東　貴利子

奄美諸島は、九州本土と沖縄の間に位置する諸島であり、北から順に喜界島・(奄美)大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島・沖永良部島・与論島という美しい八つの島から成り立っています。これらの島は、基本的には共通の自然や文化を持っていますが、同時に、それぞれの島にそれぞれの自然や独自の文化が存在しているように思われます。ですので、今回は、奄美大島に生まれ育った者の一人の視点から捉える、私が考える『私の島の自然と文化』について述べたいと思います。

さて、この奄美大島についてですが、島の特徴の一つでもあるように、海に囲まれています。そして、この海こそが、奄美が誇る自然の一つであると言っても、過言ではないように思われます。海水浴場として親しまれ、人々のひと夏の思い出として心に刻まれる海。代表的な観光スポットとして活躍している海。釣り人や、ダイバーに好まれる海。サーファー達が求めたくなるような、波のくる海。水平線に夕日が沈む美しさを、演出してくれる海。自然の偉大さ、そして時には自然の恐怖をも伝えてくる海。一言で『海』といっても、その存在は、様々な感動や思い出、安らぎ、そして自然特有の荘厳さやゆとりを島に住む人・訪れる人々に与えているように感じます。

ところで、現在、奄美を離れ生活している私ですが、奄美に帰省した際に、味わいたくなる景色の一つが、やはりこの海です。海の色、砂浜の感触、そしてそれらを取り巻く風景が、『おかえり』と言ってくれているように感じます。また、以前、母がこのようなことを言っていました。『海を見たら、奄美に帰ってきたという気持ちになるでしょ。住んでいる時はそこまで感じなくても…。あの匂いを嗅ぐと。お母さんは、学生時代そうだったんだけれど。』と。二人が見ている風景は同じ場所のものとはいえ、時空は異なります。しかし、そこから受けるメッセージは似ているのだと思うと、自然が伝えるメッセージの普遍性に、偉大さを感じました。

また、海と同様に、奄美の観光スポットとして、重要な役割を果たしている自然の一つに、マングローブ群が挙げられます。ここは、私自身もお気に入りのスポットです。水面に浮かぶ木々は、見ているだけでも神秘的な気持ちにさせられます。そして、実際この中をカヌー等で探検してみると、さらに、不思議な感覚に襲われます。どこまで続いているのか、検討もつかない木々。まるで、そのまま別世界に繋がっているような、錯覚ともつかない感覚を味わうことがあるように思います。このように、言葉を持たずとも、心に迫ってくるものを与える力を持っているのも、自然の魅力の一つではないかと、私自身、考えています。

さて、ここまではどちらかと言いますと、自然の持つ明るいイメージを述べてきましたが、自然は、私たちの生活に温かさや優しさと言った、温もりだけを与えてくれる存在でしょうか。

この答えは『否』である、と思います。

実際に、自然が奄美大島にもたらす災いの代表的な事柄として、台風や雨が多いことや、ハブを含む、人間に害をあたえる動物が存在していることが挙げられます。

ハブについては、私自身、危機に直面した経験がないので、本当の恐ろしさは分りません。ですが、ハブに噛まれた人のお話を聞いたり、少しでも山奥に入ると『ハブに注意』と手書きで書かれた、リアルでインパクトのある看板を見たりすると、その恐ろしさは、取り返しのつかない恐ろしさなのだろうと。単純に、そう感じます。

また、台風については、実際に幾度か体験したことがあります。家から出られないほどの怖さと危険さを感じさせる風。いつになったら止むのだろうと思わせるほどの強い雨。このような台風ですから、大方の人が、外に出る気は自然と失せますし、出ることは危険を伴うので、好みません。また、これによって、それまで愛情を込めて育てられていた農作物が、大損害を被ることもあります。土砂崩れなどの自然災害が起こることもあります。家そのものが破損することもあります。また、海を介して発達している交通機関は殆ど足止めをくらいますし、陸続きの場所でも、通行止めとなることがしばしばあります。この影響で、人々の計画は、予定通りに進まなくなることもあります。また、牛乳など、そのたび毎に船によって運ばれてくる食料品が不足する等、生活が不安定な状況になることもあります。　そのため、人々はそれを見越した上での計画をたて、行動する必要があり、そのようにする習慣が、知らず知らずのうちに身につき、浸透しているように思います。また、台風は去った後にも、影響を及ぼします。去った後の外は荒れていますので、人々はやむを得ず掃除をします。そうです。置き土産まで残していってくれるのです。

このように台風は、精神的な面・便宜的な面といった両面から捉えても、決して、温もりを感じさせるものではありません。まさに、有り難い存在とは言い難いものです。

しかし、この台風がくることによって、島の人は、全てが思い通りになる訳ではない状況を体験し、それを、受け入れるといった耐える力が身に付くように思います。また、このような不安定な状況であるからこそ、互いに励ましあう・助け合うといった協力する心が育つように思います。そして、時代がいくら進化しても、自然というものには手が届かないといった体験に直面するため、自然を敬う心、崇拝する気持ちを、忘れずにいられるように思います。

そのように考えてみると、『マイナスと思われることでも、少し違った角度から物事を見てみると、プラスに繋がることもある。』という風に、自然の存在から改めて気付かされ、幅広い視点の持ち方を、学んでいるようにも思います。

では次に、『文化』について述べたいと思います。と、ここで気に掛かった点が一つ。文化

とは、一体、何ものなのでしょう。

そのような訳で、私自身が考える文化の概念を、簡単ではありますが記したいと思います。

文化とは、『それぞれの、国や地域が自然や風土の影響を受け、生まれ根付いている、感じ方や考え方、そしてそこで営まれている生活の行動パターンや風習』ではないかと考えています。もちろんこれは、私自身が考える文化概念でありますので、そう思わない人もいると思いますが、今回は、この枠に従って、奄美大島の文化について述べます。とは言いましても、これでもまだ、広い視点から捉えた文化です。そこで今回は、地域の特質を最もよくあらわす文化要素の一つである『音楽』と『時間の流れの感じ方』に焦点をあて、この二つを、文化の指標として取り上げたいと思います。

前者の『音楽』についてですが、これには、実に様々な地域の色が含まれていると思います。奄美においては、奄美独自の歌は、島唄と呼ばれ、親しまれています。この島唄は、歴史的な流れから、音階的に琉球文化の影響を受けていますが、後に、薩摩藩の頭括に置かれた奄美は、本土からも影響を受け、琉球文化とヤマト文化の二つの色を持ち合わせながらも、そこからまた、奄美特有の新しいものを創り出し、育んでいった面白いものを持っていると言われています。そのような島唄のなかでも、演奏形態に重点をおき、実際に、私が島唄と関わった際に感じたことや、考えたことを述べたいと思います。

島唄は、生活に密着して生まれてきたものが多いということがあり、その詞は、生活を営むうえで人々が感じる喜びや、嬉しさ、苦労、そして別れの辛さなど、時には婉曲的な表現であっても、比較的、人の感情が赤裸々に綴られているように感じます。このように、詞に重要な意味を含む島唄は、演奏時にもおいても、そのことを大切に思いながら、表現されているように聴こえます。また、島唄の特徴の一つとして、即興性に富んでいる音楽であるということが言えると思います。実際、奏者たちは、その場の雰囲気から感じたことを歌詞にし、そのまま曲に合わせて歌うということをしばしば行います。そして、その場で唄を聴いている者たちと演奏している者たちの間には、奏者と聴衆という関係ではなく、一緒に一つの時間・音楽を創っている者『同士』という関係が、自然と形成されているように思います。また、このような人と人が自然と知らず知らずのうちに溶け込んでいくということは、奄美では、音楽の面に限らず、日常生活のいたる場面で見られる、文化の一つであるように感じます。

ところで、この前、奄美をテーマに曲を作りたいと思い、ピアノの前に座った私ですが、しっくりくる音楽（メロディー）が浮かんできませんでした。なぜならば、奄美をテーマに表現しようとすると、ピアノ一つでは表現できなかったからです。つまり、私の頭の中に湧き上がってくる音楽には、人の声やピアノ以外の楽器の音が、その時すでにイメージの中に含まれていたからです。つまり、奄美の音楽を単一の音色で表現することが困難だったのです。そのことに気づいた私は、はっとさせられました。なぜなら、奄美の音楽は、一人だけの思いや環境というより、寧ろ、人々の感情やそれを取り囲む環境から、自然と生まれてくる音楽ではある

のではないかと、原点に戻った感じに襲われたからです。

次に、後者の『時間の流れの感じ方』について述べたいと思います。奄美には、一般的に（奄美大島の人々の間では）島時間と呼ばれる特有の時間が存在しています。これが、どのような時間か一言で言いますと、『ゆったりと流れている時間』です。日常生活は（表面的には）、十二進法により規定されている時間に沿って営まれていますが、人々の心の中には、もう一つ、この島時間によって動いている時間があるように感じます。

では、この島時間について、具体的な例を交えながら、私の意見を述べたいと思います。『島時間』というものは、ゆったり流れているだけあり、時計が示してくれる時間とは、ずれることが度々あります。例えば、仲の良い友人同士10人が集う際、『午後5時に、○○に集合』という約束を立てたとします。ところが実際、この約束は、守る人が7人もいれば、それは奇跡的なことに近いといっても構わない約束なのです。約束は、人と人の繋がりを円滑に保つために、結ばれるものであり、それは果たさなければならないものだと思われています。そこに、約束の持つ意味があるといえるとも思えます。しかし、この（島時間文化を持った者の間に結ばれる）場合の約束は、そうではないのです。勿論、守ったことにより不可解に感じる人はいませんが、破ったとしても30分程度の遅れなら、『仲の良い証、気心知れている関係である証』と、互いに理解されているように感じます。そして、この島時間が浸透している奄美では、物事の捉え方や考え方も、全体的にスローテンポであるように思います。そして、このような時の中で営まれているスローライフな生き方も、奄美特有の文化であると、考えています。

以上に述べたことから、私自身改めて感じたことがあります。それは、自然や文化というのは、一言では言い尽くせないものであり、顕著に目に見えることは少ないものであるが、人々の心に、様々な刺激をもたらす大切な存在ということです。また、奄美というところに『独自』の自然や文化があるということは、お隣の地域、さらに世界中を見渡せば、それぞれにそれぞれの自然や文化が存在しているのだろうと思いました。そしてそれらは、それぞれの魅力を持っていると思うので、それらに触れ、感じ、考え、異なる自然や文化のあり方も理解し合えるようになれたら、幸せだと感じました。

私の島の自然と文化

琉球大学法文学部
総合社会システム学科
経営学専攻　4年
青木　悠（あおき　ゆう）

沖縄の自然と少年時代

沖縄は日本本土から海を隔てはるか遠い南に位置する島です。日本で唯一亜熱帯海洋性気候に属する沖縄は、桜の開花や梅雨が本土と比べ随分早く、強い日差しや年中咲き誇る花々、青い空と海は正に南国特有の情景です。ジャングルが密集する北部のヤンバルでは、ヤンバルクイナ、ノグチゲラといった鳥類をはじめ、両生類、昆虫、植物などさまざまな固有種が生息し、世界でもまれに見る生物の多様性を有しています。

しかし、私がこの沖縄という島に生まれて 23 年。日々の生活においては、冒頭に記したような希少生物を見る機会はほとんど無く、学校で行われる自然観察授業などでヤンバルへ出向き、その生態の一端を垣間見るのがせいぜいでした。沖縄で生まれ育った以上、沖縄の自然に対する知識は幾分ありますが、それらを身近に感じることはほとんどありませんでした。ですが、子どもの頃から多くの時間を海で過ごしてきました私には、ある意味沖縄独特ともいえる思い出があります。

私は幼少期を那覇で過ごし、小学校に上がると同時に、現在の家がある本島中部、沖縄市に移り住んできました。自然に囲まれたというには少々都会化された街ではありましたが、南北に伸びる沖縄本島の中でもくびれの多い地形にあたる中部は、東西どちらに向いてもすぐそこに海があるという遊び盛りの子どもにとっては非常に恵まれた環境でした。東海岸では北谷や砂辺で釣りや海水浴を楽しみ、西海岸の泡瀬では干潟に出向いて貝やカニ、タコなどを取りにいく。こんな遊びを多くの友人らと毎週のように行いました。

その中で私達が最も熱中したのは釣りで、午前で授業の終わる毎週土曜日にそれぞれが声を掛け合い、午後からどの漁港に糸を垂らすかを計画。各自の自宅で昼食を終えた後、自転車に乗って集合しました。当時、まだ幼い子どもが見よう見まねで適当に作った仕掛けにかかってくれる魚はそれほど多くはありませんでしたが、十名あまりの友人らとテトラポットの上や砂浜で遊びはじめると、もはや魚が釣れるかどうかは二の次になってしまいました。今考えると、釣りに行った本当の目的は魚を釣ることではなく、たくさんの友人を連れ立って遊びに行くことだったのかもしれません。その他、学校の周辺にあったグアバや山桃、野いちごを目ざとく見つけては、その時々のおやつとして食べるなど、都会ではありながら自然と接する機会は多かったように思います。

しかし、幼い頃遊んだ海の多くは今では埋め立てられ、食べ物を探した裏山は宅地開発で消えてしまいました。沖縄はその独自の自然資源で多くの観光客を引き付ける魅力的なリゾート地となっています。ですが、リゾート化はその反面多くの自然を人間の都合通りに捻じ曲げる傾

向にありますし、大切な自然という言葉が方々で聞こえる割には、海岸の埋め立て、ヤンバルの森の道路開発が後を絶ちません。表立っていわれていることと現実とは必ずしも一致しない、今の沖縄を見ていると、そんな矛盾に直面することが多い気がします。

琉球文化と戦後復興

中国との貿易を蜜に行っていた琉球王朝時代、中国から訪れる冊封使をもてなすために琉球舞踊が発達し、中国への貢物や高官の着衣として織物文化が花開きました。しかし、日本政府の影響力が増すにつれてこれらの文化は衰退し始めることになります。その動きとは逆に、それまで上流階級のみの文化とされたものが徐々に一般大衆の文化と同化し始め、今なお続く琉球芸能や工芸品、織物文化へと変化していきます。こういった上流層から庶民層へと徐々に浸透していった文化とは別に、もともと庶民層で育まれた文化も数多く存在します。エイサーや空手は本土にもよく知られた存在ですが、その他にもハーリー、シーサー、さんしんなど、どれも今だ多くの人々の心を引き付けてやまない豊かな文化です。

私も小中高と学校の行事でエイサーを踊り、音楽の授業ではさんしんを習いましました。高校の時に始めた空手は、今では黒帯をとるまでに上達し、家の門には小さなシーサーが座っています。この辺りの文化はヤンバルの自然などとは違い、現在も私達の生活の身近な所に存在しているように思います。

しかし、これら多くの琉球文化も先の沖縄戦のあおりを受け、一時は消失の危機に陥りました。戦中、天皇を国家の最高意思とする軍政が敷かれ、沖縄方言を含む多くの文化が弾圧の対象になりました。続いてアメリカ軍の攻撃が開始されると多くの文化伝承者や文化財が次々と失われ、終戦時には瓦礫の山が残るのみの惨憺たる状況になります。ですが、そんな中にあってさえ多くの琉球文化は再び芽を吹くことになります。米軍の収容所で戦後を迎えた沖縄県民は、有り合わせの材料、棒や空き缶、落下傘の紐などを使って即席のかんからさんしんを作り、歌と踊りを再び取り戻しました。戦後の復興が勢いづいた頃、辻を代表する戦前の遊郭で舞妓をしていた女性達が琉球舞踊、琉歌の再生と振興に勤め、首里城など文化財の多くも修復、再建されることとなりました。戦中戦後とあれほど長く抑圧されてきた方言も、今だ日頃の生活の端々に登場します。

このことからも、戦後沖縄の復興と、文化の再建は二人三脚の歩みを続けてきたといえるでしょう。

本土から見た沖縄と私の中の沖縄

生まれたときからずっと沖縄で育ってきた私は、今の大学に入学して初めて、本土出身者から見た沖縄観に触れることとなりました。彼らの口から発せられる言葉の多くは観光客と同じもので、「海がきれい」や「地域性が独特だ」といった内容ですが、これが私の中にあった沖縄観を大きく変えるきっかけとなりました。それというのも、これまで知人友人含め県出身者ばかりの付き合いが多かった中、日頃当然として意識してこなかった環境や習慣に、県外の人から見た意見を取り入れる機会を得たためです。

いつもすぐ側にある海がどれほどきれいなものか、沖縄県民の生活がいかに特異なものであるか、そして県外出身者から見た自分自身はどのような存在なのか。そういったやり取りを幾

度と無く繰り返した結果、今まで見えてこなかった沖縄を次第に意識するようになりました。友人がきれいだからと進めてくれた海へダイビングのライセンスを取って潜り、異常な存在だといわれた米軍基地に目を向け、温かみがあるといわれた県民性を詳しく観察するにつれ、それまで大して関心を寄せていなかった日常の中に沖縄がどれほど特殊で魅力的な存在であるかといった自負が生まれ、それからの私は大学生活の多くを沖縄研究に当てるようになりました。

まずは手始めに親や親戚からこれまでに見てきた沖縄の歴史、文化にまつわる話や、沖縄の人々が島の自然とどのように接してきたのかといった話を聞き。その中で、古くは曾オバーの話から沖縄戦前後の話、戦後の基地闘争や中学時代山を越えて登校していたという母の話など、それまで身近に存在していた多くの人々から非常に興味深い話を沢山聞くことができました。更にそれ以外にも、町で出合ったオバーや反基地運動を続けているおじさん、沖縄の魅力に引かれて移住してきた夫婦など、これまで関わりの無かった人々からも様々な沖縄観を聞き、私の中にあった沖縄に対する意識が目まぐるしく変化していきました。

語り伝えることと沖縄のアイデンティティー

大学２年の頃から、自分が学んだ沖縄を他の人にも伝えたいという気持ちが芽生えだした私は、学内にある学生ガイドの組織に入りました。ここでは、沖縄戦を中心とした学習を深め、本土から修学旅行にやって来る中高生を相手に、沖縄の歴史、文化、戦争を案内して回るのですが、その中で私はガイドブックに載っているような観光地を案内するのではなく、私たち県民に密着した暮らしや文化、過去の記憶を同世代の子供たちに面白おかしく語るよう心がけてきました。

自然の美しさや沖縄特有の情景など、誰が見ても感じる沖縄らしさに加え、月ごとの祭りや行事、本土との文化の違いや自身の実体験に基づいた人々の暮らしぶりを話すにつれ、修学旅行生の中から沖縄に関心を持って積極的に質問してくれる子や、今までは南国のリゾートとしての見方しかしてこなかったが、沖縄の新しい一面を知ることができたという声を聞き、その体験に喜びを感じた私はこれまで多くのガイドを引き受けてきました。

不思議なことに、ガイドを続ければ続けるほど、自分の中でも沖縄をもっと知りたいという思いが大きくなり、今まで以上に関する沖縄の知識も増えていきました。伝える側の立場に立つことにより、これまで自覚できなかった歴史の重みや、自分が接してきた文化の特異性、それを誰かに伝えられた時の喜びなど、学生ガイドを始めて以来多くの発見を得ることができました。

しかしながら、自分が沖縄を知るにつれ、沖縄県民でありながらも同年代の友人やより若い世代の子供たちの中にある沖縄らしさが徐々に消えつつあることに気付きました。会話の端々に方言やなまりは残っているものの、知識としての沖縄、沖縄人としてのアイデンティティーを自覚している人はまれで、ものの見方や考え方、生活そのものも徐々に本土化が進んでいるように感じられます。かつて私自身がそうだったように、沖縄に生まれたという事以外、沖縄に対する関心やそこに息づく自然と向き合う機会が限りなく減っているのかもしれません。全ての県民に沖縄人としての自覚を強要するつもりはありませんが、その面白さに気付き、これほど強い興味を持つようになった私の経験から考えるに、沖縄を知ろうとするきっかけさえあ

れば自ずと沖縄のすばらしさに心奪われるのではないでしょうか。

リゾート化が進む一方で犠牲になる沖縄の自然、本土の価値観が浸透していく過程で徐々に薄れていく沖縄のアイデンティティー。確かに、観光客が落としてくれるお金のおかげで沖縄の経済が潤っているのは事実ですし、普段私たちが見る、テレビなどのメディアは新しい価値観や豊かさをもたらしてくれました。しかしながら、時には自分自身の育った場所の存在を意識しなければ、気付いた時には既に取り戻すことができないほどその存在が遠ざかってしまう危険性があるように思います。

普段私たち沖縄県民が何気なく接している自然、歴史、文化、風土、そして何よりそこに住む人々こそ、今の沖縄をささえるかけがえの無い宝ではないでしょうか。今後も私は、一人の沖縄人としてこの沢山の宝を受け継いでいきたいと思います。